

遠矢

シテ

浅利与市

ツレ

源義経

ツレ

井ノ木四郎近清

所

長門壇の浦

「扱も源平両家。舟と陸との戦ひにて。海陸の声。天にひゞき波を穿て。震動暫くも止事なし。

与市 「扱又平家の方には。山家の兵藤次秀任。九国一島の強弓彎。

義經 「源氏には和田の小太郎義盛。是も劣らぬ精兵にて。三町計隔たる。平家の勢は。多く矢さきにかかりけり。

同 「其戦ひは鬼神も。く。面をむくべき様もなし。

井ノ木一声 「源平互ひにあらそひて。矢さけびの音隙もなく。爰をせんとぞ見えける。

サシ 「武士の。弥猛心をしらま弓。矢さきをそろへあらそひける。

サシ 「我は是平家の侍。伊勢の国の住人。井の木の四郎近清なり。

同 「いかに源氏方の者共。我弓勢を受て見よと。名乗もあへず近清は。く。重籠の大弓に。大矢を懸

て。よつぴきひやうと放つ矢は。雲にうづまき矢

叫びし。雷のごとく鳴わたり。暫く有て其矢は。

判官の乗給ふ。船の舳さきをくだくかと。矢ぶる
ひしてぞ立にける。く。

義経
「いかに誰か有。

与市
「御前に候。

義経
「只今平家の舟より射ける矢。船の舳さきにたつた
り。いそぎ見て來り候へ。

与市
「畏りて候。参りて見候へば。御船の舳さきに。山

鳥の羽にて矧だる白籠の大矢。十四束三つぶせ。

沓巻一束計置て。漆を以て伊勢の国の住人。井の
木の四郎近清と書て候。天晴是は聞及びし平家方
の強弓引。其いきほひを見せんためにてもや候ら
ん。

義経
「誠に渠は双びなき。強弓と聞えたるよ。

井ノ木
「喃々源氏の船へ物申さう。

与市「何事にて候ぞ。」

井ノ木「某唯今仕りたる矢を御返し候へ。」

与市「いかに申上候。只今舟より申つる事を御聞あそばされ候か。恐れ多き申事にて候へ共。此矢射返し申さずば。源氏の方の恥辱たるべし。某一矢仕つて。源氏の目をさまさせ候べし。さりながら。敵の矢束は某が矢よりは短ふ候へば。某が矢にて仕らんと。憚りもなく申上れば。」

同「判官を始め諸軍勢。与市が言葉のすゑ。頼母敷兵者と。皆々かんじ申けり。」

クセ「其時与市。心中に祈念して。南無や八幡氏の神。」

此矢の功を見せ給へ。縦へ我身は埋木の。朽るとも此弓を。強きにつよく陸奥の。千曳の石もすゑ通る。神の誓ひを。頼むのかりまたの大矢にて。」

与市「十五そくみつぶせ。」

地「塗籠簾の大弓の。九尺計に見えけるを。三度頂戴

礼拝し。能引少時。保つてひやうといふ。其矢は四町余をこへ。大船を射抜て。井の木四郎が真中を。はつしと射通せば。井の木はこらへず逆様に落。船底に倒れたり。

歌、同
「時の面目弓勢の。く。名を上巻のいと恐ろしき。

有様と源平は。少時静まりて。互に船は遙かに隔たりぬ。

義經
「いかに与市。只今のふるまひ更に凡慮よりなすに

あらず。誠に源氏の運つよく。八幡も御神力を。

添へさせ給ふならんと。神感肝にめいする所に。

歌、同
「不思議や雲の中よりも。く。白旗一流れ舞さがつて。源氏の陣にぞ懸りける。

同
「其時沖には神靈顯はれ。我は八幡大菩薩なり。此度源氏の軍を守り。平家を亡し天下を治め。弓矢の家を守るべしと。宣ふ御声もはるかに聞え。宣ふ御声も遙かに聞えて。神はあがらせ給ひけり。

底本.. 国立国会図書館デジタルコレクション「古今謡曲解題」丸岡桂著
『宴曲十七帖 謡曲末百番』国書刊行会編